

杏の木

櫻田 玲子

晩秋の風の中で、落葉松の防風林はびょうびょうと鳴り続けていた。アサは、寝床の中で何度も寝返りをうちながら、起き上がるための勇気を付けようとしていた。冷たい外気はまだ布団を凍付けさせるまでにはいかないが、まもなくその季節はやってくるはずだ。

昨夜の雨嵐は、僅かに残った樹々の枯葉を落し、今朝は霜の模様を薄い窓ガラスに刻んでいるはずだった。

アサは水汲みに玄関を出て身震いした。十一月は陰鬱な月である。寒さで雪の無い枯れた畑は、黒く凍って冷たい陶器の堅さとなり、

歩くのも容易ではない。畑の緑の路をバケツを天秤棒で担ぎ、裸足のままぞつり履きで家の下の湧き水を汲みに行くのが、朝の勤めであった。

この頃この天秤棒が酷く重く感じられる。胸が苦しいことも度々あった。特にこんな寒さの中では鈍い重さが締め付けるような息苦しさを感じたが、家の中の仕事は、片時も休むことができなかった。

アサがこの家に嫁いできたのは五年前。幼い娘は可愛い盛りだが、アサに似たのが体が弱く、目を離すことができない。農家に生まれたアサだったが、体が丈夫でないため七人いる兄弟の末っ子で姉や兄に甘やかされて育った。両親もあまり仕事をさせずにいたので、まず家事仕事に慣れるのに時間がかかり、その上畑仕事もこなさなければならず、随分苦労する事になった。実家は歩いていける距離にあったが、厳しい婚家の母の手前そうそう戻るわけにはいかなかった。

自分は余り長くは生きられない。そんな漠然とした不安がアサをぼんやり包んでいた。だから、娘にはなんとか強くなって欲しいと願うのだったが、義父は初孫をずいぶん甘やかし、こんな田舎暮らしでは不釣合いな菓子などを買い与え、返って食の細

い子となつてしまった。

「かよ、ごはん食べな。ほら魚美味しいしょ。」アサは少し苛立ちながら娘の茶碗を持つ手をひっぱった。「やあん。もういい。」かよは、ごはんを一口いやいや口に入れ、味噌汁だけコクコクと可愛い音を立てて飲んだ。

「こんげに、この子は食が細くて誰に似たんだかね。」

「ああいい。あとでじいちゃんが何かやる。」

義父は直ぐにかよを抱いて膝の上に座らせた。夕飯に、夫の正造はいつも居たためしかなかった。暗くなるまで畑で働き、その後馬の世話をする。余り遅くは年寄りには待てないので、先に夕飯を済ませるのがいつも事となっていた。

遅くに腰にランプを吊り下げて正造は家に入ってくる。疲れきった夫は口を効かない。ほとんど何も言わずにアサは、正造と向き合つて食事を取る。本当はかよの事など話したいのだが、夫の黙りこくった顔を見ると言葉が口から退いていつてしまう。

「ああ、寒くて腰がいてえ。寝る」

正造は、この家の長男だった。貧しい農家で下に2人弟がいる。下の弟はまだ中学生で、上のは頭もいいので親戚の歯医者に養子に出している。本当は、下の弟との間にも2人女の子があつたが、いずれも小さいうちに病気で亡くしていた。家が貧しいのは親父の道楽のせいだと、正造はいつも愚痴をこぼしていた。

北海道の開拓農家は、明治以降南部の函館や、中部に早くから入っているが、大雪山が阻んだため、中央を越えて東にはなかなか入る事ができなかった。アイヌの人々は独自に道や船を駆使して、朝鮮半島や、日本本土とも交易を行っていたが、日本人にとつて北海道は未開の蛮地にちがいがなかった。本州で立ち行かなくなった者たちが、政府の開拓政策に乗つてやつて来たのも、随分長い期間があつたようだ。オホーツクのこの地に船でやつて来た人々は、囚人に開かれた道を通つて奥地に序々に進んでいった。

新潟から義父が入植したのは、アサの祖父の頃よりずっと遅く、もう網走の奥地であるこの地にはあまりいい土地は残つてはいなかった。富農の家に生まれた彼は、裕福に育ち、父親が死んで身上崩したのだと義母はいまいましたそうにいつていた。

そのためか義父は貧しい身には過ぎた贅沢

をした。茶を立てる趣味がある。時によつては網走の花街に出かけることがある。その度に、息子が馬でむかえに出なければならぬ。

汽車は卯原内の駅から日に3本しかない。

夕方の便に間にあわなければ、もう朝まで帰る方法が無い。そのまましておけば、花街の事、とんでもない金額の支払いになる。

正造は1頭しかない馬を農作業に使い、夜にも使うことが苦々しかった。若い自分

連れ戻されるのならともかく、歳いった父親を引き取ってこななければならぬことに、腹立たしい思いがひとしおだった。

今夜も冷たい風が吹いている。そろそろ初雪の朝を迎えてもおおかしくはなかった。

かよはすやすやと寝息を立てている。来年正月くらいは、かよを実家に連れていきたいと、アサは思っていた。実家の父母は、アサが体のせいで婚期を遅くし、七歳も年上の夫を持つはめになった事をひどく苦にしていた。

姉達もその事には不満であったので、事あるごとにアサを実家に呼ぼうとした。昭和の始め、女が嫁がず自立するといった観念が無かった時代、いやが応でもどこかに嫁がさねばすまない時代だったのだ。その事は、誰よりもアサ自身が一番よく理解していた。

この家では、女の子は育たないのではないか？アサはそんな事も考えていた。娘を二人も無くした義父は、アサもかよも可愛がった。しかし、それは猫可愛がりであつて、愛情に根ざしたものでは無いようにアサには感じられた。なにより、息子や義母の厳しい態度には決してはむかうことが無かつたし、都合が悪いと自分は逃げ出してどこかへ遊びに行つてしまう。家の中の事では、義母が全て取り仕切っていた。若いアサでは、しきたり様の事や、家事は解らなかつたし、実家は秋田出身なので、新潟の義母のやり方はまったく知らない事ばかりだったのだ。夫の畑仕事を手伝えは、とろくさいからしなくていいと言われた。また、無理をすれば、必ず寝込む事になる。アサは次第に、家の中に居場所を失つていった。

「姉さん。この頃なんだか辛そうだね。だいじょうぶかい？」

末の弟はそれでも十五になったが、幼さが残るやさしい子だった。かよのいい遊び相手にもなつてくれる。父親に似てくりくりした目で、髪の毛もくりくりしてどこかバタ臭い感じの子であった。

「この頃冷えるから。洋ちゃんは風邪引かないかい？」

「風邪なの？そっぴいちゃちよつと熱っぴいね。」

洋平はくつたくなく義姉の額に手を当てた。

「いやな洋ちゃん。」

アサはほっとして笑いながらその手を避けた。

この頃洋平は、どこか男を感じさせるようにもなってきた。まだほんの子供なのだが、家の中で抛り所の無いアサの心に、唯一確かなやさしさが洋平に感じられたからかもしれない。

案じた通り、やがて初雪が降り始めた。その歳の暮れ、日本が戦争を始めた。

夏子は、車を走らせながら聞くとともに無く母と叔母の声を聞いていた。姉妹で話している、幼い頃と同じになるらしく、お互いにちゃんずけで呼び合っている。はしゃいだ様子に肌寒い春も陽気に感じて、夏子は腹の中でくすくと笑っていた。緑が枝に吹き始めたので、山菜を取りに母達の実家のあった卯原内に二人のお供で出かけてきたのだ。ギョウジャニンニクはどこにでも生えていた。ちょっとした沢や小川の縁に新鮮な緑を開いて、強い香りを放っている。他の植物とはあきらかに違って力強かった。

昼は車中でお弁当を食べた。車外の景色を眺めながら、母は子供の頃の思い出話を聞かせる。たいていの事は始めて聞く事ではない。歳をとった人間が、昔話が多くなるのはしかたのない事と、近頃は諦めている。その内に、叔母が実家に行ってみたいと言い出した。二人の実家は、程近い丘の上にあつたが、もう空家となつて二十年以上経つ。戦前のしかも藁葺きの土壁家だったから、崩れ果てているに違いない。私も数十年行ったことも無い。「近くに住んでいるのに、もう何十年も行ったことが無いの。一人じゃ熊も怖いし行けないもの。」

叔母の婚家は網走で、母は転勤族と結婚した。祖父母はだいぶ昔に離農して、叔父と暮っていたがもう二人とも亡くなっている。ごく小さい頃、何度か母に連れられて行ったが、大人になつてからは訪れたことも無かつた。

車はゆっくり坂を上がつていった。叔母の導きによつて、畑沿いの砂利道を車のわだちを頼りにゆっくり進む。車が時々腹を草に擦るのが気になつてしかたがなかつた。「こんなに上だつたかい。」母が不安げな声を出した。「たしかそうだと思ふんだけど・・・」叔母の方も確かでは無い。

しょうがなく更に車を登らせた。前方に牧草地が開け、登りつまりにひょいっとキタキツネが顔を出した。こっちでいい。そついったように思った。これ以上は無理だと、夏子は車を止めた。

「ああ、あれ、杏。いいんだわ。ここでいいんだ。」母が牧草地を登り始めた。もう若くない二人には急な上り坂がきついらしかつたが、叔母は姉を追いかけて、ふうふう言っつてついでいった。人家へ通じる道すら無い。二十数年という月日はこんなものなかと思つた。自分の二十数年はそんなに長いようにも思つていなかった。学生時代もついでこの間と思つてしまふ。だが、二人の実家はすっかり崩れ、形をとどめず草の繁る小山と化していた。

戦争が始まつた事は不安ではあつたが、北海道の片田舎では情報も少なく遠い世界の事のように感じていた。そのずつと以前から、生活は苦しく物は無かつた。アサの家には新聞も無いので、ラジオで放送をたまに聞くくらいだ。義父が網走でいるんないわさを仕入れてきた。その暮れはいつもと変わらぬ暮れだった。

歳が明けて直ぐに、実家から兄がやって来た。大きな塩鮭と一升を抱え、雪まみれで蓑にも雪がたつぷり掛かつていた。

「いやあ、今年の雪だてなんぼもひどい。お年始だて大変だあ。」兄は挨拶もそこそこに、かよを抱き上げた。「かよ、おつきくなつたな。どうだ、伯父さん家に泊まりにこんか。」そつ言つて、兄はどうでもアサ親子を連れて行くことするのだった。それでも、まだ雪も固まらないから帰りに難儀する、そのうち固まったら行かすと義母が約束した。兄はしぶしぶ帰つていった。

「まんだ正月も終わらんに、家の嫁が遊びに行くなどあるもんか。おら、実家なんぞ、

子供生みにも帰つたことはねえ。」

義母は、自分の苦勞を長々愚痴り、アサにも無理にでも苦勞させたいと言わんばかりだった。それから、数日は義母の愚痴が続いた。

義父は、それでも兄さんがあれだけ言つていたのだからと加勢するよつな事を言つと、正造も渋々同意した。

そして、小正月の頃にようやくアサはかよを連れて実家に出かけることになった。

「ねえさん、おれ送ってくよ。かよまだ小さいもの。荷物あるし、おれ持ってくよ。」
洋平はくりくりした目をして、それほど多くもない土産などを風呂敷に包み、背中にひょいとしまった。

「あんまり長居するんで無い。あちらも大変だろうから。」義母は、まだ少し不満げにそう言った。アサは始め気が重かったが、実家に近づくにつれて、懐かしい思いに胸が熱くなった。道はまだあまり雪も固まっていけないので、膝ぐらいつまで埋まってしまう処もあったが、かよは、まだ負ぶさらなくてもいいと言って歩いていた。小さな彼女には雪をこぐのが始め楽しいようだったが、しだいに疲れてきた様子だった。今日にかぎってかよは聞き分けがいい。母親の手をしっかりと握り、時々アサの顔をじっと見るのだった。

「どうしたのかよ？」

「かあちゃん。顔赤い……」

かよが不安げに言ったので、二人の後ろから付いて歩いていた洋平が、慌てて前に回ってアサの顔を覗き込んだ。

「ほんとだ。ねえさん、ちょっと休もう。体つらくないかい？」

洋平は、甲斐甲斐しく道の脇にあつた集乳缶の集積場所に二人を導いた。アサは手にりに持たれて、自分の体が異常に熱いことに気が付いた。夜の明ける前に水汲みを済ませ、朝飯と昼の準備と、掃除も済ませてきた。その頃から体はだるかったが、出かけた一心で忙しくしていたのだ。体のだるさは毎朝の事になり、夕方にはもう何所でも構わないから、座り込みたい辛さで足が震えることもよくあつた。それに、空咳が出て熱っぽく夜はよく眠れなかった。本当の処、アサの体はもう限界にきていたのだった。「でも。」アサは下腹部を愛しげにさすつた。家の者にはまだ言っていないが、アサの体には新しい命が宿っていたのだった。

洋平が気転を利かして近所の知り合いの農家へ走り、馬籠を借りてきた。アサとかよをそれに乗せて、洋平は上手に馬のたずなを操つた。この辺の少年達でも、馬籠を扱うのは難しいのだが、洋平は器用に大きな馬を操り3人はその日の午後遅くに実家についた。実家では首を長くして待っていた。兄の家には電話があつたが、婚家にはないので連絡の取り様がないのだ。洋平は馬籠を返すので急ぐと行ってすぐに帰っていった。

実家に戻るとすぐに、アサは寝込んでしまった。

爽やかな春の日差しが届かぬくらい、木々が鬱蒼としていた。家の周りが昔と随分違うので、母はショックを受けたのか何も言わない。崩れたトタン屋根が残るのは、元の牛小屋らしい。その前あたりに黄色なラッパ水仙が一群れポツカリと咲いていた。十数年前、一度此処を訪れた叔母が植えたものだと言う。

家の下にあった小川は枯れてその縁にあった水汲み用の湧き水の小屋も、木々に占領されて見当たらない。僅かに木片らしきものが散乱していた。

「なんにも無いね。」夏子は、押し黙った母に向かって声を掛けた。彼女の事が少し気になったからだ。夏子にはごく幼いころの薄れた記憶しか無いこの場所は、ただ荒れた木々の谷地にしか感じられないが、母の胸中を思うと複雑だった。昭和四十年代は、激しい変化の時代だった。戦前の生活様式は電化製品によってすっかり変わり、それまでのランプ、水汲みの時代からは想像できない物となっている。そんな変化の中で、母の時間は急速に進み、随分以前から現代の生活が現実であって、朽ち果てたこの実家の時代は忘れ去った時代のように感じていたのだろう。だが、母親はすぐに元気を取り戻した。そして叔母を相手に昔語りを再開させた。

「あんだ、知らないだろうねえ。あそこの杏の木母さんが植えたんだよ。甘いものもろくに無いから、おやつになるようになって。」

「ああ、そう……。知らなかったけど、あたしはよく食べたよ。学校帰りに家に入るまえにねえ。」

「私はもう大きくなってから実が成るようになったから、あんまり食べた記憶がないんだけど。」

二人は雑草が繁り傍まではいけないので、ちょっと手をかざして大きな杏の木を眺めた。

それは途中で裂けたようになっていて、枯れる寸前といった感じだったが、この木は花をつけるのが遅く、まだ桜の時期なので緑も少なかった。枯れ掛けたように見えるが、もしかしたらもう一月程したら咲くのかも知れない。発電機の錆びたのが近くに転がっていた。

「そろそろ帰りませんか。お父さん待ってるわよ。」過去に浸った二人を連れ戻すのは、どうやら自分の役目だと思い声をかけた。

「こんなになるまで返しもしないで！」

すぐ上の姉が怒りを抑えずにそう言った。アサが奥の床の間に眠っている間、家族は居間に集まって話込んでいた。兄夫婦と父母の暮す実家は広く中庭もあった。床の間は中庭に面し、かよはそこで一人雪に戯れていた。

「かよ、こつちさきてもち食え。寒かろう。」

祖母がかよの小さな手を自分の着物の中に引き込んで、冷たくなったのを体温で暖めてくれる。

母の実家では、誰もが二人を愛してくれた。それ程豊かではないが、皆暖かい人達なので、

寒い冬の中でも寒さを感じないのだった。

かよは幼いながらも、その事を敏感に感じ取っていた。

「ありゃ、お目出度もあるだろうよ。」

兄嫁が口を挟んだ。医者がアサの体を見て、網走の病院で検査した方がいいと言つて帰つていったのは、昨日の事だった。両親としては当然そうしたかったが、何分嫁がせた娘である。病院となれば費用もかかる。婚家がどう言うか、兄もその事でまた行かねばならないと考えていた。

アサは久しぶりに朝寝をし、暖かな家族に囲まれて穏やかな気分にも包まれていた。婚家では、気の休まる事がなかった。いつも、冷たい空気の中に居るようで、心の芯が冷えたように重だるかった。姉のハツは、網走から里帰りしていた。大きな商家に嫁いだ彼女はなにかにつけアサを心配して手紙をよこし、かよに着物を送つてよこしたりした。

「起きたかい？どう、お粥作ったの。食べる？」姉は優しく妹を起こし、羽織を着せてやった。「かよは？」「父さんがもち食べさせてるよ。もうすぐ子供らも学校から帰ってくるから、そしたらかよちゃん遊んでもらえるから。」姉妹は娘時代のように、寄り添って話合った。人生は解らない。成績も良く、美人で気立ても優しい妹が、どうして自分よりもこんな苦労を重ねなければならなかったのか。姉は溜息をついて、妹のやつれた姿を眺めた。このままこの家に置いてやるわけにはいかないのか、それも考えた。だが、ここは兄の家だ、相手の家がこの娘の家なのだ。

かよは従兄弟達と遊び、大勢の子供といるのが楽しいのか元気に食事もよく食べた。

「かよ、もう家に帰らんでもいいか？」

「ううん。祖父ちゃんがやく帰れって」

「こつちのじいちゃんじゃだめか？」

父は本気で口惜しそうに言い、ちくちくするひげをかよの柔らかなほっぺたに摺り寄せた。

三日してアサは天気の良いのを見計らって婚家へ帰ると言った。兄は馬糞を準備し、土産もたくさん持たせた。母はいつまでも手を握り、兄嫁に抱えられて泣き出した。

「ばか。泣くやつがあるか。アサまたいつでも来い。待ってるからな。」

父も切なげに言った。兄は馬にそれと鞭を入れ、馬糞は静かに走り出した。アサはかよを抱きしめていつまでも両親と姉達を見詰めていた。「いたいよ。かあちゃん。」強く抱き締められたかよは不満げに言った。

家に戻るとアサは妊娠を夫に告げた。義母達も喜んだ。

「今度こそ男がええ。いやあ、きつと男だあ。」

一姫二太郎だもな。」

夫は、自分の跡継ぎのまだ無い事を気にしていた。かよの時は喜んだが、少し残念という風にも見受けられた。それだけに、期待は大きいようだった。妊娠が解ると、義母も急に重いものなどアサに持たせないようになり、

水汲みも洋平が買ってでた。少しだけ自分の場所ができた。アサはそう思った。

春になって、アサは身重の体で小さな木の苗をどこからかもらって来た。坂の下の農家から分けてもらった枝を挿し木したらしい。

家への入り口にあたる、坂道の曲がり角の崖の上にその苗を植えた。よく陽の当たる場所で、きつと甘い実をたくさん付けるようになるだろうと考えたのだ。

妊娠を機に畑仕事は休み、家事も義母が手伝ってくれたのだが、アサの体は余りかばしくは無かった。春になる前に、兄はまたわざわざやって来て、一度病院にと話して言ったが、妊娠のせいにされてそのままとなっていた。

アサはひたすら願っていた。この子を産むまでは、なんとか持って欲しい。忙しい春を迎えて兄達もやってくる事は出来なかった。

畑仕事もまるでしないわけにも行かない。足りない手のため義母までかりだされ、家事も身重の体に応えた。夏になって、アサはかよを生んだ時とは違う痛みに苦しんだ。

胸を掻き毟られるような苦しき、産み月をまじかにしてアサは倒れた。産婆が呼ばれ2日ばかりでアサは子を産んだ。

「まあ、なんとか子も無事。ああよかった。妊婦は血まで吐くし、こんな大変なお産初めてだわ。」

産婆はさんざんに愚痴って帰っていった。

アサの並々ならぬ弱り方に、始めて家の者も事の重大さに気が付いた。それでも、生まれた子は女の子だったので、不満げな義母だったが、ついに実家に人を呼びにやめた。

麦の刈り入れ時で、皆忙しい最中だったが、知らせを聞いて父母も兄夫婦も慌ててとんで来た。

「こんなになるまでよくもほって置いてくれたもんだ。今すぐ連れて行く！」

兄は怒り出し、アサをふとんでぐるぐる巻きにして抱き上げ馬車に積み込んだ。早速に駅まで運び車を頼んだ。

病院に運び込まれたアサはすでに衰弱ききついていた。姉が駆けつけ母と付きっ切りで看病したが、アサの病名ははっきり伝えられた。

「結核です。その上妊娠とは、むちゃすぎる。」

持っても2・3日。今のうちに合せる人には連絡してください。」

あまりに酷い宣告に母は気を失った。

かよは所在なく畑の中をばったなど追いかけながら過ごしていた。家の中が騒がしいと、

叔父がそつとかよを連れ出して、近所の農家に泊まらせてもらった。叔父が一緒に寂しくはなかったが、夜中にかよは目を覚まし、母を呼んでは叔父を困らせた。一度祖父に、網走に汽車で連れて行ってもらい、寝ている母に会いに行ったが、母の顔は真っ白できれいだなと思っていた。それっきり、母とは会えないでいた。もう、麦の藁はにおに積まれて畑のあちこちに小さい家のようになっている。

夕暮れ時、寂しくなるとおの影に行つて覗いてみる。「かあちゃん。」ひよいと覗くと、

そこに母がいるのではないかと、思つてみるのだが、いつも藁臭い匂いに風が吹くだけだった。

「綺麗だねえ。もう桜も終わりかと思っていたけど。」

母達姉妹は、夏子に杏の木の横に生えたまだ若い感じの桜の枝を取ってくれとせがんだ、

二人の背丈では、確かにとどかない位置に桜の枝は満開の花をつけていた。夏子はそれ程背が高い方ではないが、現代人らしく大きく逞しい。戦争など知らない世代であり、男女同権の教育を施されている。

だが、昭和初期生まれの親の世代が、折に触れ話す過去の事について考えないという事はなかった。開拓の苦勞、その後も何世代か農業は受け継がれたが、多分自分達の世代で大きく考え方が様変わりしたと思われる。

それは、一つには戦後の教育があり、そして技術進歩による経済の激変があるのだらう。

母の実家が廃れたのは、農業を受け継ぐ者がなかったからだ。土地だけは残っている。家は朽ち果て、曾祖父の開拓は徒勞に終わったのだらうか。人は自分の力で稼ぎ、自分の力で生きなければならぬ。社会の変化によって、女の方がやはり不利もあるが、どうにかやってやれない事も無い。いい時代になったものだ。そう、前の世代は言う。

桜の枝を掴み取り、ばきつと折って二人に手渡した。二人は帰りの車の中で、桜の香りを慈しむように嗅ぎ、大事そうに腕に抱えていた。

「かあさんの杏もきつとまだ咲くよねえ。」

叔母が言うのに母は大きくうなずいていた。

おわり